

ぐろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十二年七月一日発行（毎月一回一日発行）
第十七卷第三号（通巻第九五号）

鈴



ぐろっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第195号

7. 2010

灸花

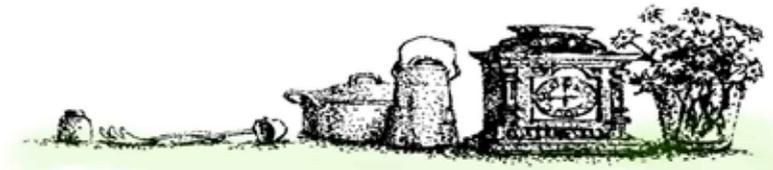
品川鈴子

婆しやがみ袋まさぐる灸花

辻地藏貧乏蔓そよぎ寄る

青嵐温泉元は昼夜地の呻り

九曲がりに鉄気の有馬坂も夏至



緑蔭に屯したるは愛煙派

桶川飛行学校

体当たり飛行習ひし草いきれ

特攻の厠に絡む灸花

ブリキ葺き特攻の廊梅雨に漏る

紅の花特攻兵の風呂は錆び

特攻の寮を劈く遣らずの雷



玉

鈴

吟

東京 佐田 昭子

閉店のチラシをのせて花吹雪
みすず刈る父の郷より春キャベツ
土つきのはうれん草買ふ道の駅
太陽に声かけて種浸しみる
風のゆくシーツの白さ緑立つ

兵庫 塩出 眞一

鳩の来る桃太郎像駅うらら
城跡に砂塵巻き上げ春嵐
満開の桜待ち呉れ同期会
舟でゆく新郎新婦風光る
波止うららブラジル国花イペ咲いて

東京 静 寿美子

花明り台詞稽古の低き声
空席の有りと花冷えレンガ坂
病名を聞き返せず花の下
花びらの舞ひて大樹の在処知る
梯の疾く流れよと花の雨

大阪 島 純子

花冷えにすらと卒寿の共白髪
師は卒寿和歌山城は芽吹き中
花冷えにレガッタ漕ぎ出す大川へ
花曇りうづ潮自し息詰めて
夢舞台ニユーチュリップに声上げて

香川 島内 美佳

大聖堂上りつめれば春の街
春の雪三角屋根の家々に
早春の野にカリヨンの鳴り響く
春の宵ライトに浮かぶ白鳥城
春なかば句材となりし犬逝きぬ

大阪 島本 知子

花冷えや隣りのビルのポヤ騒ぎ
新社員喫煙中の別の顔
新社員バスに詰められ研修へ
引越しの車列にかかる花吹雪
客船も暫しし休憩春の昼

愛媛 鈴木てるみ

図書館の電子カードや春麗
館長の市章のバツジ煌めけり
手で紡ぐ絹糸の艶陽炎えり
合格のラベル貼られて春袖
香炉の埋火入れどきを逆算す

大阪 鈴木 浩子

犬ふぐり古代のこだま蹠より
池の辺に猫が寝そべる行基の忌
縁談の言の葉久し花青木
捨て子猫箱にうごめく四条橋
初宮の嬰に春鳴ヒユヒユと

香川 陶山 泰子

念を押す猫の餌やり春炬燵
十代の春眠尽きることもなし
ライオンの仮面で眠る花の下
空耳にシロの鳴き声花吹雪
海風に揺れ花びらの旅支度

岡山 瀬口ゆみ子

仰ぎ撮るその額へと花片舞ふ
長閑しやまたも失せ物捜し中
レントゲン鎖骨美人と万愚節
有耶無耶にせしこと幾つ花ぐもり
躍動の肢体あらはに春疾風

兵庫 高橋 大三

生野の淡雪口開くも舞ひ込まず
銀山跡 鉦夫人形暖かし
淡雪舞ふダムに発電用風車
春嵐手製風向計躍る
桜蕊集めて遊ぶ姉弟

愛媛 武司 琴子

客迎ふ声のよそゆき万愚節
乳母車囲む笑顔やつくしんぼ
なほざりの庭一面にすみれ草
蹲踞の底に灯りぬ落椿
繕ひし穴も花型春障子

大阪 竹下 昭子

夕空の晴れて鶯鳴き競ひ
新党の数々生れて春不順
八重桜重たき雨に耐えて居り
一枚を羽織る気温の春霖に
長雨に倦きて仔犬の瞳の縋る

大阪 武田ともこ

小島みな古戦場なり春霞
国牛みの二神立ち在す春岬
観潮の船に名付けて咸臨丸
春深き土生より沼島へと船出
春休みひつそりかんの通学バス

薬草歳時記

(一九四) ベンケイソウ (弁慶草・景天)

三 輪 慶 子

こはき葉の弁慶草の色やさし

辻 蒼壺

弁慶草という強そうな名前をつけられたこの花は、まさに弁慶のように強い草なのです。カラシコエ、ハナキリンなども同じ弁慶草の仲間ですので、育てやすい鉢物としてお持ちの方も多いことでしょう。日当たりのよい所でたやすく栽培できる多肉質の多年草です。ぼつたりした葉に不似合いな優しい小花を茎の先にいっぱい咲かせます。散房花序というところからやすすいでしょうか？

中国名「景天」として中薬大辞典にも記載されています。葉をよく洗って火で焙るなどして表皮をはがし患部に当てて押さえておく。腫物、傷に有効です。腫れをとり血を止めます。別名血止草とも言われますが、芝生の中の雑草の血止草とは違うものです。歳時記では弁慶草の別名として血止草を載せています。芝生の中の血止草はセリ科なのです。

ベンケイソウの薬効として清熱、解毒、止血の効能が掲げ

られています。内服についてはよくわかりません。同じベンケイソウの仲間でセイロンベンケイソウというのがあります。熱帯、亜熱帯の植物で落ちた葉から芽を出して増えます。「はからめ」「ハッピーリーフ」などといわれています。ベンケイソウと同じ薬効があり、その上抗炎症効果、免疫抑制作用があるとして注目されています。

ところがこの草を大量に食べた牛二頭が、四十八時間以内に死亡したのです。よほど強い毒性成分が含まれているような植物から、期待の新薬が生まれるのかもしれない。

このセイロンベンケイソウは「マザリーフ」とも言われているのですが、よく似た名前の「子宝草」というものもあります。カラシコエの仲間でクローンコエとも言われます。これは茎についている葉の周りにたくさんの子株をつけます。暖かく乾いた地が増えすぎるほど増えるので、子宝を望む人たちのマスコットになっているとか。

同じくカラシコエの仲間「エンジェルランプ」という可憐な花があります。花はセイロンベンケイソウに似ています。薬効でも繁殖という点でも面白い弁慶草です。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」(北隆館)

「中薬大辞典」(小学館)

「薬草採取」伊藤一男(主婦の友社)

著者略歴 神戸薬科大学卒

ベンケイソウ (イキタサ) [キリンソウ属] (べんけいそう科)

Sedum erythrostictum Miq. (= *S. alboroseum* Baker)

(弁慶草 (中)景天)



セイロンベンケイソウ
マザーリーフ (ハッピーリーフ)
子宝草



カラコエ



E.S.

尼寺の薬圃に群れる弁慶草	弁慶草岬に大き誓子句碑	琉球の昔を偲ぶ弁慶草	弁慶草立往生の齡なり	首塚の影のうごかぬ血止草	べんけい草産院の夜の白みつつ	明方の滝のよき音血止草	雨つよし弁慶草も土に伏し	歌棄や星のごと咲く弁慶草	がむしやらの弁慶草も枯れにけり
*藤田かもめ	*塩出 眞一	*佐田 昭子	秋山巳之流	渡辺 昭	中尾束愁子	飯田 龍太	杉田 久女	角川 源義	小林 一茶

(*くろつけ)

鈴の奏

品川鈴子選

大仏の鼻穴くぐる春休み
兵庫 前田 玲子

入学を前に自転車こまはずし

メダリストと同じ髪型入学児

花婿の袖丈短し春の宴

扱ひの難しき齡紙風船
香川

のどけしや留守番仕事成さぬ犬
横内かよこ

樟脳の匂ひし母の花衣

根分けして吾子も母校の後輩に

隣家より沈丁の香とどきたり
福島 悠紀

ふわふわの昼のオムレツリラの花

歩道橋間近に迫る新樹光

春しぐれ読経のさ中孫生まる

草青む口の達者な三歳児
兵庫 先山 実子

ひよろひよろの若木にぼつりミニ桜

名も知らぬ鳥に揺すらる紅手毬

長閑さについ立寄りし手芸店
兵庫 中村 吟子

次々と訃報の届き春寒し

花びらを行きつ戻りつ手の平に

櫻咲くここ一番のほめ言葉

揚雲雀青空更に掂げおり

忌事の他に逢ひたき紹の女
兵庫 太田 實

特ダネをつかみし蟻の大手振

盆近き平氏腕塚浜の声

解夏の僧碧眼瘦軀たじろがず
兵庫 改正 節夫

春の泥守る球児の足掬ふ

庇へと朝の清気や名残雪

補修せる名器長持ち春の風邪

春の塵部屋は干し物人は隔
兵庫 平田恵美子

春服をまとひて小犬先駆る

佇立てて足早やに過ぎ春コート

春荒れに蹴手繰られたる予定表

暮遅し千歩加える万歩計
兵庫 有本 勝

春寒し田舎歌舞伎の幟立つ

引く波の磯辺に残る桜貝

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 年 森 恭 子 //

*選句は全て 品川鈴子

ふわふわの昼のオムレツリラの花 福島 悠紀

ハイカラな芳香のリラは南ヨーロッパなどに自生する。淡い紫や紅や白の可憐な花を眺めながら、ふわふわの焼きたてオムレツが匂うとは。ささやかでも優雅な昼食で、マリーローランサンの絵に似た彩も楽しい。主婦は有り合わせのお茶漬で済ます昼ご飯は、もう時代遅れの感。

長閑さについて立ち寄りし手芸店 先山 実子

手芸は経済活動を伴わない余暇活動。ふだんからゆったりと楽しんでいる手芸、しかも今日はなんだか長閑な日。つい立ち寄ればつい材料を買ってしまう。あれもかわいい、これもかわいい。買ってしまつたら、また楽しんで作る穏やかな日々。

櫻咲くここ一番のほめ言葉 中村 吟子

メダリストと同じ髪型入学児 前田 玲子

オリンピックの花形競技では若い肢体をしなやかに披露し、表彰台に立つ選手は全身に衆目を集める。殊にメダルを授かる折は、頭をさげるのでおのずと髪型が際立つ。学齢期の児らも憧れの選手にせめて髪型でもあやかりたくて、晴れの日は結い上げたポニーテールやショートカットなど凛としたいでたちで臨む入学式。

根分けして吾子も母校の後輩に 横内かよこ

春には根を分けて移し植えると、植物は勢いよく繁茂する。庭の手入れも怠らず、子らは健やかに育ち、敬愛する両親と同じ学校へと進学。同窓の一族なら話題も豊かで団欒のはずむことだろう。

歌舞伎での「ほめことば」は役者の容貌をほめたたえるもの。櫻も、花見の連れ合いも、ほめるには、今ここ、というタイミングが大切。逃せば、効果半減。今回はうまくほめたことでしょう。

忌事の他に逢ひたき細の女

太田 實

若さだけでは着こなせない紐を、結び上げた髪と立ち姿で決めているいい女。作者は後姿を遠目に見つめ、薄く透き通った紐が忌事場でありながら涼しげで、禁忌の場所ならばこそその色気を感じている。当然「あふ」は「会合」ではなく、「逢瀬」。

春の泥守る球児の足掬ふ

改正 節夫

春の甲子園はよく雨が降る。夏の土は乾きが速いのに、春はぬかるむ。緊迫した試合で守備側にとって一番怖いのはエラー。気が張り、体が堅くなり、応援も見守る中、打球に飛びつこうとして泥に掬われた足。歓声の攻撃側…。

春服をまとひて子犬先駆ける

平田恵美子

ペットが家族と言われて久しい。赤ん坊の時もらわれてきた仔犬も春になって散歩に行けるようになった。愛らしい柄の春服を着せて、ちよるちよると飼い主の先を走る子犬に「ほらほら危ないよ」と言いながらあとを追う作者。

梅の咲くところで曲る駆け比べ

有本 勝

最近ほめつきり減った路地。車が来ないので安心して思いつき駆けられる。みんなが知っている梅を目印にして、曲がって戻ってくるコース。たいてい最年少が転んで泣く。最年長が声をかけて遅れる。「柵からばた餅一等賞」のボクは春には小学生になる。

職退いて早や十五年葱坊主

市橋 香

十五年は、生まれた子が中学を卒業するほどの年数。それを「早や」と感じた作者は、充実した退職後の生活を送っているのだろう。退職後の趣味で多いのは菜園。どの和食にも欠かせない脇役、青い時代を食する葱が長けて葱坊主になれば、種がぎっしり実る。(以下略)